

むかし、あるところに、お金持ちの家があつて、娘が三人ありました。

あるとき、お金持ちは、娘を結婚させようと思つて、家の前にこんなふたを立てました。

「娘と結婚したいものは、申し出よ」

ある日、ひとりの男の人がやつてきました。すると、お金持ちは、

「そんなら、まず、お堂のそうじそうじをしてくれないか」といいました。

つぎの朝、その人は、大きなおにぎりを四つもらつて、お堂のそうじに行きました。そして、そのまま帰つてきませんでした。

つぎの日、また別の男の人がやつてきました。けれども、この人も、おにぎりを四つもらつてお堂のそうじに行つて、帰つてきませんでした。

そのつぎの日、またもうひとり、男の人がやつてきました。この人も、大きなおにぎりを四つもらつて、お堂のそうじに行きました。

男の人がそうじをしていると、むこうのほうから、もやもやと霧きりが立つてきました。男の人は、おにぎりのひとつを半分に割つて、「それつ」と、投げつけました。すると、霧はばあつと晴れました。そこで、そのままそうじを続けました。ところが、しばらくすると、また霧が、もやもやと立つてきました。男の人が、またおにぎりを半分に割つて投げつけると、霧は晴れました。こうして、霧のたつことにおにぎりを半分ずつ投げてやつて、ちょうど四つのおにぎりがみんななくなつたときに、お堂のそうじが終わりました。男の人は、お金持ちの家に帰りました。

つぎの日、お金持ちは、

「わら一本を千円で売つてきてくれないか」といいました。

男の人は、わらを一本持つてでかけました。

歩いていくと、むこうから、ホウの葉をたくさん持った人がやつてきました。そこへ風が吹いてきて、ホウの葉が飛ばされそうになりました。男の人は、その人にわらを渡して、

「これで葉をしばらくいい」といいました。その人は、お礼に、ホウの葉を二枚くれました。

しばらく行くと、みそ売りが、

「三年みそ。三年みそ」とさけびながらやつてきました。みそおけにふたをしていなかったので、男の人は、ホウの葉を渡して、

「これでふたをするといいよ」といいました。みそ売りは、お礼に、三年みそのみそ玉をふたつくれました。

男の人は、みそ玉を持つて歩いて行きました。夜になったので、ある大きなお屋敷やしきに泊とめても

らいました。その家の主人は、病気で寝こんでいました。そして、三年みそを食べなければ治なおらないというので、男の人は、持っていたみそ玉を出しました。主人は、それを食べると、夜が明ける前に治つてしまいました。主人は喜んで、

「お礼には何がいいでしょう」とききました。男の人が、

「いやいや、何もいりません」というと、

「それでは、少しだけでも」といつて、お金を千円くれました。

男の人は、とうとう、わら一本からお金千円を手に入れて、お金持ちの家に帰って行きました。

ところが、お金持ちは、こんどはこんな問題を出しました。

「家のうらに、から竹の林があるんだが、から竹が何本あるか数えてくれないか」

男の人は家のうらに行きましたが、から竹の数があんまり多いので、ぼんやり立つて見ていました。すると、はちが飛んできて、

一万三千三百三十三ぶんぶん

と、うなりました。

そこで、男の人はすぐに家にもどつて、

「一万三千三百三十三本です」と答えました。

お金持ちは、ざしきに、三人の娘をすわらせて、男の人にいました。

「跡取り娘はどの娘か、あててごらん。うまく当てたら、あんたをその娘と結婚させよう」
あとと

三人はみなよく似ていたので、男の人はこまつて、

「ちよつと失礼」といつて、手洗いに立ちました。すると、便所にはちが飛んできて、

なかなかブンブン

と、うなりました。

男の人は、さつそく部屋にもどつて、

「まんなかの娘さんです」といつて、指さしました。そのとおり、まんなかにすわつていた娘が跡取り娘でした。

男の人はその娘と結婚して、家をつぎ、幸せに暮らしたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『黄金の馬』森口多里／三國書房